

## 『樟蔭国文学』総目次(1～50号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4695">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4695</a>

# 樟蔭国文学

## 目次

### 【第一号】

定家と家隆

清慎公集・義孝集続稿

猿蓑鑑賞——蒿羽連句

後京極撰政と三十六番相撲立詩歌

川端康成の文長指数

立原道造について

紹介

『平安時代文学語彙の研究』

昭和三十九年一月二十日発行

安田章生

竹内美千代

細川馨

原田芳起

中根千賀子

吉田玲子

竹内美千代

### 【第二号】

茶道と定家

日本靈異記と中世説話集

翻刻書陵部蔵花園院御製（光厳院御集）

伊東静雄について

昭和三十九年十一月二十日発行

安田章生

山根賢吉

原田芳起

岩田久美子

### 【第三号】

宇津保物語の中の人物（その二）

——嵯峨院およびその周辺——

昭和四十年十一月二十日発行

原田芳起

和泉式部日記語彙考

——夜のほごろに——

西行小論

伊良子清白

書評

安田章生著『日本詩歌の正統』

竹内美千代

野村妙子

木村喜代子

西畑実

### 【第四号】

一院という称呼について

——物語文学と歴史との連続——

謡曲における引き歌

——信光の能を中心に——

近世和歌と定家

与謝野寛の歌論意識

——第一次『明星』をめぐる——

関西文学遺跡 その1

円珠庵・妙法寺

昭和四十一年十一月二十日発行

原田芳起

西畑実

安田章生

岩鼻絹子

嶽恭子

### 【第五号】

宇津保物語登場人物論拾遺

紫式部集の歌と詞書

西行の本歌取り

昭和四十二年十一月二十日発行

原田芳起

竹内美千代

西畑実

書評

安田章生著『藤原定家研究』

関西文学遺跡 その2

花屋跡・義仲寺

八亀 師勝  
杉本 真理子  
竹島 智子

【第六号】

長篇物語におけるならびの巻の意義

——残された問題点について——

手習・夢ノ浮橋私見

信光の能と漢詩

石橋忍月研究(一)

異版日本永代蔵考

関西文学遺跡 その3

「真空地帯」の舞台大阪城周辺

湖南の秋

葵祭

【第七号】

いもせ語義弁証

源氏物語等の解釈に触れて

源氏物語胡蝶の巻

中宮御読経の条私註

昭和四十三年十一月二十日発行

原田 芳起

久保 重

西畑 実

嘉部 嘉隆

中洲 佐由美

北沢 洋子

永山 友子

岸田 知子

久保 重

原田 芳起

昭和四十五年三月二十日発行

久保 重

原田 芳起

久保 重

紫式部集補註

——かみをかうぶりにて——

和泉式部日記研究の諸問題点とその整理(一)

附 和泉式部日記歌と家集の関係一考

番外謡曲引詩考

石橋忍月研究ノート

『惟任日向守』論(上)

西行と芭蕉

資料紹介

大西家蔵番外謡本について

万葉のふるさと奈良

「葵祭」

【第八号】

男手・女手名義考

生の完成としての出家

——御法の巻・幻の巻私見

石橋忍月研究ノート

『惟任日向守』論(中)

『女殺油地獄』小考

資料紹介

大西家蔵番外謡本(二)

時代祭

竹内 美千代

山本 和子

西畑 実

西畑 実

嘉部 嘉隆

嘉部 嘉隆

竹島 智子

西畑 実

西畑 実

西村 典子

佐野 寿子

原田 芳起

原田 芳起

久保 重

久保 重

嘉部 嘉隆

嘉部 嘉隆

馬淵 康子

馬淵 康子

馬淵 康子

西畑 実

西畑 実

中塚 裕子

【第九号】

昭和四十七年三月二十日発行

中古における「のたまふ」の意味

原田芳起

敬語の意味体系の問題に触れて

夕霧の巻私見(その二)

久保重

枕草子鑑賞

山本和子

皇后定子の生涯よりみる——(一)

九七段・百段・一七九段・二六二段

「新勅撰集」四季部の題について

西畑実

舞姫論争の論理

嘉部嘉隆

舞姫論争についての一異見(三)

方言研究の一つの試み

杉藤美代子

大阪・東京・福島方言

義太夫節

西浦順子

「いろ」の音声学的研究

資料紹介

大西家蔵番外謡本(三)

西畑実

【第十号】

昭和四十八年三月二十日発行

「なま女」の解説をめぐる問題

原田芳起

写本表記の批判的処理

その裳をとり給ひて

久保重

浮舟の巻私見

新勅撰集と本歌取り

西畑実

舞姫論争の論理(二)

嘉部嘉隆

舞姫論争についての一異見(五)

「花籠」、はな・かごと(サクラガ)サク考

杉藤美代子

動態測定による日本語アクセントの研究(その2)

芭蕉の月の句

竹島智子

西行との比較において

「とりかへばや物語」小論

福留歩

資料紹介

大西家蔵番外謡本(四)

西畑実

【第十一号】

昭和四十九年三月二十日発行

万葉集の「間」字の訓義をめぐる

原田芳起

接続形態「あひだに」

「ほどに」についての語彙論的考察

八の宮の遺誠と大君

久保重

總角の巻私見

源経信伝をめぐる

安田純生

中世草庵文学の系譜より見た『幻住庵記』

「枕草子」のひとつの魅力

竹島智子

資料紹介

大西家蔵番外謡本(五)

西畑実

「門外芸術」漱石号(大10・1) 目次

「愛聖」有島氏追憶号(大12・8) 目次

嘉部嘉隆

【第十二号】

昭和四十九年九月十日発行

上代の形容詞性接尾辞「じ」

——打消か類似か——

藤原家隆の本歌取りに関する調査と研究(二)

第一部 家隆の本歌取り一覽(下)

石橋忍月研究余録

アクセント型の聞こえのゆれと発話のゆれ(その2)

——長崎アクセントと大阪アクセント——

原田芳起

西畑実

嘉部嘉隆

嘉部嘉隆

杉藤美代子

中塚裕子

高橋美絵

阪本玲

西畑実

西畑実

西畑実

資料紹介

大西家蔵番外謡本(一六)

【第十三号】原田芳起博士古稀記念号

昭和五十年十月十日発行

物語年立研究史の一齣

——若紫の巻の時間をめぐって——

東屋の巻の左近少将の待遇法をめぐって

紫式部と絵

永保初年の源経信

——政長八条亭歌会をめぐって——

勅撰集と本歌取り(一)

原田芳起

久保重

竹内美千代

安田純生

西畑実

西畑実

西畑実

徒然草における「なまめかし」について

芭蕉の風狂精神に関する覚え書

石橋忍月に関する基礎的覚書

——石橋忍月研究余録(承前)——

大阪方言「拍語アクセント」

ピッチ曲線と持続時間について

賀茂祭詳解

其一、葵草、葵梓鬘、及び葵・桂考

資料紹介

大西家蔵番外謡本(七)

『浄瑠璃歌月丸』

紹介

北村英子著『なまめかし』

北村英子

竹島智子

嘉部嘉隆

杉藤美代子

井本久美子

山本和子

西畑実

大橋正叔

原田芳起

原田芳起

原田芳起

久保重

安田純生

北村英子

西畑実

谷垣伊太雄

谷垣伊太雄

谷垣伊太雄

谷垣伊太雄

谷垣伊太雄

谷垣伊太雄

谷垣伊太雄

【第十四号】

昭和五十一年九月十日発行

「気爾余波受吉奴」存疑

源氏物語に見る待遇法の一用法について

経信の母について

松浦宮物語における「なまめかし」について

勅撰集と本歌取り(二)

『袖貝の記』校異

——『太平記』のための基礎的覚書——

森鷗外文芸評論の研究(一)

嘉部 嘉隆

——「小説論」改稿の意図と方法

日本語のアクセントが拍および音素の持続時間  
及ぼす影響について

杉藤 美代子  
光谷 富美子

ザ行・ダ行・ラ行の混同と

その聴取及び発話について

杉藤 美代子

——和歌山県北部の場合——

木村 恵子

『笈の小文』一考察

稲田 裕子

『笈の小文』一考察

安藤 桂子

【第十六号】西畑教授 追悼号

昭和五十三年九月二十九日発行

『新勅撰集』の一傾向

西畑 実

「落ちず」「去らず」の成句について

北村 英子

紫の上の死をめぐる

久保 重

『太平記』巻六「赤坂合戦事付

人見本問拔懸事」について

(改稿)俳諧表現論としての本情の説

谷垣 伊太雄

森鷗外文芸評論の研究(二)

原田 芳起

——「小説論」の論理——

嘉部 嘉隆

鷗外『舞姫』研究史考(三)

檀原 みすず

「生れ出づる悩み」への一視点

福本 彰

——有島武郎の異常性の側面から——

太宰文学における「花」

松田 智子

白話小説の珍訓

小林 祥浩

——『范巨卿鵝黍死生交』のばあい——

近畿アクセントの発話における喉頭制御について

杉藤 美代子

——筋電図に基づく考察——

杉藤 美代子

【第十五号】久保重教授 古稀記念号

昭和五十二年十月八日発行

舌耕文学について

中村 幸彦

文学的発想における「さいはひ」

原田 芳起

——中古物語文学に関する試論——

源氏物語に見える「おはします」

久保 重

「おはす」についての一考察

久保 重

——王室と外戚との関わりから——

良運法師について

安田 純生

新葉和歌集と本歌取り

西畑 実

流布木太平記の一傾向(一)

谷垣 伊太雄

森鷗外文芸評論の研究(三)

嘉部 嘉隆

——「レッシングが事を記す」改稿の意図

檀原 みすず

鷗外『舞姫』研究史考(一)

檀原 みすず

【第十七号】

昭和五十四年十月十日発行

鷗外橋牛対立期

谷 沢 永 一

「就中・加之・遮莫・拳世」の訓法小論

鈴 木 一 男

語彙と表現との間

原 田 芳 起

『狭衣物語』における女性の描写について

多 屋 久 栄

——語彙的観点から——

北 村 英 子

古今著聞集における「なまめかし」について

谷 垣 伊 太 雄

『小袖目のゆかり』について

嘉 部 嘉 隆

——『太平記』尊良親王配流譚考——

嘉 部 嘉 隆

森鷗外文芸評論の研究(四)

嘉 部 嘉 隆

石橋忍月に関する基礎的覚書(補遺)

嘉 部 嘉 隆

内田魯庵文芸批評の研究

吉 田 有 美 子

——紅葉の作品に関する評を中心に——

杉 藤 美 代 子

アクセント及び語音の、発話と知覚について

杉 藤 美 代 子

【第十八号】原田芳起教授 退職記念号

昭和五十五年十二月十日発行

物語文章解釈の一つの視野を探る

原 田 芳 起

——落窪物語の場合——

『後拾遺集』巻六「冬」評釈(一)

安 田 純 生

鈴虫の巻の構造についての断章

久 保 重

『太平記』(日本古典文学大系)

谷 垣 伊 太 雄

年表索引稿(一)

内田魯庵文芸批評の研究(二)

吉 田 有 美 子

『夏木立』評管見——魯庵・忍月の比較を中心に——

森鷗外「舞姫」異本考

檀 原 み ず ず

——縮刷本「美奈和集」の位置づけのために——

研究ノート

舞姫第二作説についての疑問

嘉 部 嘉 隆

没理想論争の論理

橋 本 佳 代 子

上代文献所見の間投助詞「と・に・を」を小論

鈴 木 一 男

書評

鈴木一男教授「初期点本論攷」に寄せて

小 島 憲 之

近畿方言におけるザ行音とダ行音の混同

——ダイナミック・パラトグラフィと

スベクトログラフによる研究——

杉 藤 美 代 子

原田芳起教授・著作目録

大 谷 良 子

遠 藤 真 澄

大 谷 良 子

黒 葛 良 子 編

【第十九号】

昭和五十七年二月二十八日発行

藤壺は変貌したか

久 保 重

『後拾遺集』巻六「冬」評釈(二)

安 田 純 生

内田魯庵文芸批評の研究(三)

木村 有美子

——忍月との比較を通じてみた

構成・視点・叙述上の特色——

語形と語義と表現と

原田 芳起

——辞書の使命とその限界——

大阪方言における強調の音響的特徴

杉藤 美代子

森鷗外小特集

「舞姫」における漢字の読み方に関する諸問題

檀原 みすず

森鷗外文芸評論の研究(五)

——「幽玄論争」の論理と方法(1)——

没理想論争の論理(二)

「贗物」横行世界での「本物」志向の達成度

——嘉部嘉隆著『森鷗外』

——初期文芸評論の論理と方法——を読んで——

覆刻「舞姫再評」「舞姫三評」

「舞姫四評」(氣取半之丞)

「再、氣取半之丞に與ふる書」(相澤謙吉)

嘉部 嘉隆

檀原 みすず 編

『太平記』(日本古典文学大系) 年表索引稿(二)

谷 垣 伊太雄

【第二十号】

昭和五十八年二月二十日発行

浮舟の死は周囲に理解されたか

——蜻蛉の巻後半についての一考察

転換期の思想と文学

中世文学考察への序章 卷17～卷25

『後拾遺集』卷六「冬」の評釈(三)

『舞姫』論への一視点

石橋忍月に関する基礎的覚書(補遺二)

内田魯庵文芸批評の研究(四)

——魯庵と忍月の分岐点・浪六の評仙をめぐって——

『太平記』(日本古典文学大系)年表索引稿(三)

卷26～卷32

「四つ仮名」の混同「ザ・ゼ・ゾ」——

「ダ・デ・ド」の混同に関する史的考察

【第二十一号】久保重教授 退職記念号

昭和五十八年十一月六日発行

若菜上における紫の上について

「そのかみ」考(二)

『後拾遺集』卷六「冬」評釈(四)

転換期の思想と文学(二)

——中世文学考察への序章——

久保 重

原田 芳起

安田 純生

檀原 みすず

嘉部 嘉隆

木村 有美子

谷垣 伊太雄

杉藤 美代子

久保 重

北村 英子

安田 純生

原田 芳起



森鷗外文芸評論の研究(一六)

嘉部 嘉隆

——『志がらみ草紙』の本領を論ず』の論理

『舞姫』諸本考再論

檀 原 みすず

内田魯庵研究

木 村 有美子

『文藝小品』所収初期文芸評論の一考察

木 村 有美子

——『詩文の感應力』『詩文の粉飾』

——『詩辨』について——

島村抱月文芸評論の研究

熊 沢 美 紀

『太平記』(日本古典文学大系)年表索引稿(四)

谷 垣 伊太雄

卷33~卷40

マイコンによる索引作り

西 端 幸 雄

アクセントの認識と知覚及び発話

杉 藤 美代子

——近畿方言話者の場合——

奥 村 綾 子

久保重教授略歴・著作目録

【第二十一号】

昭和六十年一月十日発行

若菜下における紫の上について

久 保 重

——女薬をめぐって——

転換期の思想と文学(二二)

原 田 芳 起

——中世的現実主義の萌芽・形成——

『太平記』巻四をめぐる諸本の構想と構成

谷 垣 伊太雄

琵琶湖沿岸漁村方言調査・中間報告

西 端 幸 雄

——湖東・湖北地方の魚名呼称について——

ザ、ダ、ラ行音の生理的特徴

杉 藤 美代子

——大阪、東京方言話者と

アメリカ人の発音の比較による——

【第二十三号】原田 芳起 名誉教授 傘寿

久保 重 名誉教授 喜寿

木村三四吾 教授 古稀 祝賀記念号

昭和六十一年一月十日発行

虚実論の系譜

原 田 芳 起

夕霧の恋の周辺にて

久 保 重

倉橋山の松

安 田 純 生

『太平記』巻一における『対の方法』

谷 垣 伊太雄

森鷗外「舞姫」草稿における推敲の意味

嘉 部 嘉 隆

内田魯庵研究(一六)

木 村 有美子

——魯庵にとっての紅葉

マイクロ・コンピュータによる

西 端 幸 雄

ニコースの報道における発話時間

杉 藤 美代子

——及び休止時間と発話速度

——「サケ・マス交渉」の場合——

杉 藤 美代子

【第二十四号】木村三四吾教授 退職記念号

昭和六十二年三月二十四日発行

天保七年一月六日 小津桂窓宛瀧澤馬琴書翰 木村 三四吾  
虚実論の系譜(続) 原田 芳起

『枕冊子』における「ゆかし」の考察 北村 英子

『太平記』卷三の構成と方法 谷 垣 伊太雄

森鷗外「舞姫」 嘉 部 嘉 隆

草稿における推敲の意味(承前)

森鷗外「舞姫」の 檀 原 みすず

「くれの廿八日」考(一) 木 村 有美子

——本文の解説を中心に——

文字処理のためのサブ・ルーチン 西 端 幸 雄

大阪方言の「拍語」を先行語とする 杉 藤 美代子

複合アクセントの年齢による変化 中 納 千佳子

【第二十五号】

昭和六十三年三月二十日発行

古代物語の人物群素描の方法の 観察とその解釈 原 田 芳 起

——うつば物語——

鳴滝参籠(一) 西 木 忠 一

『源氏物語』における

「ゆかし」の考察(一)

『太平記』卷五の構成と展開 谷 垣 伊太雄

芭蕉の五月雨の句に関する考察 竹 島 智 子

古文の自動単位句切り 西 端 幸 雄

無声拍にアクセントを置く発話の 生成と知覚 杉 藤 美代子

【第二十六号】久保 重 名誉教授 傘寿

杉藤美代子 教授 古稀 記念号

野村 貴次 教授 古稀

平成元年三月二十日発行

女三の宮の乳母たち 久 保 重

長歌贈答 西 木 忠 一

『源氏物語』における 「ゆかし」の考察(三) 北 村 英 子

『太平記』卷六の構成と展開 谷 垣 伊太雄

芭蕉の雪の句に関する考察 竹 島 智 子

森鷗外論雑記 嘉 部 嘉 隆

内田魯庵「政治小説を作れよ」の 解釈をめぐって 木 村 有美子

パーソナルコンピュータによる 古語の自動活用 西 端 幸 雄

【第二十七号】

平成三年三月二十日発行

玉鬘の巻の「大島」について

久保 重

田上集注釈（二）

西木 忠 一

『源氏物語』における

北村 英子

「ゆかし」の考察（四）

谷 垣 伊太雄

『太平記』巻七の構成と展開

竹 島 智 子

芭蕉の鳥類の句に関する考察

嘉 部 嘉 隆

森鷗外論雑記（二）

清 水 さ ゆ り

「地獄變」試論

丸 山 満 美

夏日漱石『坑夫』に関する一視点

丸 山 満 美

【第二十八号】

平成三年三月二十日発行

田上集注釈（四）

西木 忠 一

延慶木平家物語成親説話の叙法

山 下 宏 明

——物語と登場人物——

谷 垣 伊太雄

『太平記』巻八の構成と展開

露 口 香代子

刊本『笈の小文』須磨の条における

露 口 香代子

「蛸壺や」の句解について

露 口 香代子

天治本新撰字鏡と法隆寺一切経の

石 井 万紀子

書誌学的研究

田 原 広 史

近畿中央部方言の語彙の実態

田 原 広 史

——音便・文末詞・接続助詞の世代差・男女差——

【第二十九号】

平成四年三月二十日発行

花散里巻私論

西木 忠 一

『源氏物語』における

北村 英子

「ゆかし」の考察（五）

谷 垣 伊太雄

足利高氏の役割

谷 垣 伊太雄

——『太平記』巻九の構成と展開——

西 端 幸 雄

八代集和歌語彙の性格

西 端 幸 雄

——その意味的性格と語彙史的位置づけを探る——

「さかさまに行かぬ年月よ」

西木 忠 一

【第三十号】

平成五年三月二十日発行

——試案の夜の光源氏——

西木 忠 一

『源氏物語』における

北村 英子

「ゆかし」の考察（六）

北村 英子

地方と中央

谷 垣 伊太雄

——『太平記』巻十一の構成と展開——

谷 垣 伊太雄

『ふた夜』注解（未定稿）抄

川 口 朗

——「初の夜」より——

川 口 朗

森鷗外論雑記（三）

嘉 部 嘉 隆

『浮雲』管見

木 村 有美子

——文二の恋着を中心に——

木 村 有美子

【第三十一号】

平成六年三月二十日発行

篝火にたちそふ恋の煙

西木忠一

『源氏物語』における

「ゆかし」の考察(八)

北村英子

「高氏」から「尊氏」へ

『太平記』卷十三の構成と展開

谷垣伊太雄

尾崎紅葉『心の闇』私論(一)

古典文学作品の使用語彙の性格

木村有美子  
西端幸雄

『古典対照語い表』データのコード化を通して

【第三十二号】

平成七年三月二十日発行

平安和文における「おぼしめす」表現価値

中村一夫

——源氏物語を中心にして——

山路の露注釈(三)

西木忠一  
池田良子

尊氏と義貞

——『太平記』卷十四前半部について——

谷垣伊太雄

萩原朔太郎の詩における

本文改訂の意味とその効果

吾郷公

芥川龍之介「地獄変」における

語り手の視点の問題

桑原佳代

夏目漱石「門」における作品構成の問題点

吉川裕子

【第三十三号】

平成八年三月二十日発行

万葉集

一首中に表れる同じ漢字の訓みについて(一)

「あるまじきこと」をめぐる

池田良子

——『狭衣物語』における——

朝敵か将軍か

——『太平記』卷十四後半部について——

谷垣伊太雄

藤壺の宮試論

山路の露注釈(四)

西嶋千保  
西木忠一

芥川龍之介「河童」の構成について

『曾禰好忠集全釈』を読む

岡田紀恵  
西端幸雄

【第三十四号】

平成九年三月二十日発行

「朝敵」からの脱却

——『太平記』卷十五の構成と展開——

谷垣伊太雄

『源氏物語』の二つの死と季節表現

『古今著聞集』の一考察(上)

高橋美穂子  
石本純子

——隨身説話をめぐって——

『箋注和名類聚抄』の箋注部分における

俗語、方言についての考察

山本智美

山路の露注釈(五)

西木忠一  
池田良子

【第三十五号】

平成十年三月二十日発行

將軍專氏の上洛と楠正成の死

谷垣 伊太雄

——『太平記』卷十六の構成と展開——

『古今著聞集』の一考察(下)

石本 純子

——樂人説話をめぐって——

夏目漱石論

小田 乗子

『行人』についての一考察

山路の露注釈(六)

西木 忠一

池田 良子

【第三十六号】

平成十二年三月十四日発行

あふさかの関やいかなる

西木 忠一

『将軍ノ代』への始動

谷垣 伊太雄

——『太平記』卷十七の構成と展開——

藤壺と紫の上

橋本 玲奈

——その終焉をめぐって(一)——

森鷗外『舞姫』定本作製の試み

嘉部 嘉隆

【第三十七号】

平成十二年三月十四日発行

『将軍ノ代』の枠組み

谷垣 伊太雄

——『太平記』卷十八の構成と展開——

燕村俳諧私解

石川 真弘

——「欠くくて」の巻——

森鷗外論雑記(四)

嘉部 嘉隆

藤壺と紫の上

橋本 玲奈

——その終焉をめぐって(一)——

『太平記』十岐頼遠狼藉事件小考

奥 智鶴

夏目漱石論

北川 淑恵

『こころ』の「上」「中」における語りの構造について

【第三十八号】

平成十二年十月二十日発行

「石山詣で」考

西木 忠一

——『更級日記』における——

枕草子の語詞

北村 英子

——「うるはし」——

混沌の世へ

谷垣 伊太雄

——『太平記』卷十九の構成と展開——

『太平記』

奥 智鶴

——「悪行」に関する覚書——

燕村俳画小考

福元 亜樹

芥川龍之介『藪の中』構成上の問題点

中川 貴美子

燕村俳諧私解(承前)

石川 真弘

——「牡丹散て」の巻——

【第三十九号】

平成十三年十二月二十日発行

西本願寺本『兼盛集』卷末所載の

大式三位の和歌をめぐって

中 周子

新田義貞の死をめぐって

谷 垣 伊太雄

——『太平記』卷二十の構成と展開

柏木試論

蟻 川 恭子

蕪村俳画小考(承前)

福 元 亜樹

松本清張論

稲 岡 さくら

——『ゼロの焦点』に関する一考察——

【第四十号】

平成十五年三月十日発行

「わぎもこがねくたれ髪を」考

西 木 忠 一

——『大和物語』一五〇段——

『拾遺和歌集』における物名歌

中 周子

上田秋成連句集

石 川 真弘 編

『葵上』論

高 橋 和 幸

夕霧と柏木

森 安 愛子

【第四十一号】

平成十六年三月八日発行

足利政権の「現実」と後醍醐天皇の死

谷 垣 伊太雄

——『太平記』卷二十一の構成と展開——

『道成寺』論

高 橋 和 幸

尾崎紅葉『心の闇』私論(三)

木 村 有美子

志賀直哉『范の犯罪』についての一考察  
森鷗外『うたかたの記』の

今 口 奈 帆

テクスト生成研究(資料篇)

檀 原 みずず

山路の露注釈(十二)

西 木 忠 一

池 田 良 子

【第四十二号】

平成十七年一月三十一日発行

さらさら浪まもなく岸を

西 木 忠 一

——『大和物語』第一七二段——

紫の上と女三の宮

森 田 衣 世

『大鏡』における「うるはし」

北 村 英 子

『太平記』から

谷 垣 伊太雄

『後太平記』・『観音冥応集』へ

田 中 葵

遠藤周作「白い人」論

檀 原 みずず

——その時間設定と主題——

森鷗外『舞姫』のテクスト生成研究(資料篇)

檀 原 みずず

【第四十三号】

平成十八年一月十七日発行

特別寄稿

『平家物語』の義仲を読む

山 下 宏 明

『拾遺集』における貫之歌

中 周子

——『拾遺抄』との比較を中心に——

「ゆかし」から「よしなし」へ

——『更級日記』の世界——

西木忠一

六波羅滅亡について

——『梅松論』・『陸波羅南北過去帳』・

奥智鶴

『太平記』・『太平記秘伝尽鈔』を通して——

『太平記』の終焉

谷垣伊太雄

——楠正儀と細川頼之——

向田邦子「かわうそ」小説

木村有美子

【第四十四号】

『拾遺集』における人麿歌の増補と編纂

平成十九年三月一日発行

源氏物語の研究

中周子

——柏木の人物造型について

三つの伝説

西木忠一

——『更級日記』上洛の記——

存義歌仙「弘法の」の巻評釈

石川真弘

『班女』論

高橋和幸

【第四十五号】

『狭衣物語』における「うるはし」

平成二十年三月一日発行

「歌を通してみる柏木の心情」

北村英子

『花見の記』

丸谷初江

(大阪樟蔭女子大学図書館蔵)

昭和初期の樟蔭女子専門学校国文科

——昭和三年の「教授要目」と

白川哲郎

『検定ニ関スル試験問題集』から——

【第四十六号】木村三四吾名誉教授追悼号

平成二十一年三月一日発行

『七夕帖』

(大阪樟蔭女子大学図書館蔵)

大阪樟蔭女子大学図書館

太祇等三吟歌仙「安」の巻評釈

石川真弘

「軽み」研究文献一覽(下)

露口香代子

日記・家集と物語のかかわり

蛸川恭子

『栄花物語』における「うるはし」(一)

北村英子

『新源氏物語』の挑戦

中周子

——和歌の扱いをめぐって——

【第四十七号】

平成二十二年三月一日発行

『源氏物語』における

「ゆかし」の考察(九)

北村英子

川田順・尾山篤二郎の水無瀬宮参詣

安田純生

中島敦「古譚」論

立石明日見

田辺聖子と古典文学

中周子

——『新源氏物語』における

花散里の形象を中心に——

田辺聖子と川柳  
樟蔭女子専門学校国文科

〔国語〕試験問題の翻刻と紹介(1)

森西真弓

白川哲郎

本間悦江

宮本愛美

吉田みなみ

〔第四十九号〕特集 鉄幹・晶子の世界

平成二十四年三月十五日発行

晶子恋い  
対談 晶子の言葉の世界

田辺聖子

今野寿美

安田純生

安田純生

中 周子

歌枕からの出発  
安田青風と与謝野晶子

付 昭和五年一月一八日、安田喜一郎宛晶子書簡(寛筆)

中 周子

『青年文学 鳳雛』瞥見  
資料『青年文学 鳳雛』第壹編

資料紹介

田辺聖子「十七のころ」

住友元美

【第四十八号】

平成二十三年三月一日発行

歌ことばの時代

『炭俵』全話体句の案じ様

——「成り変わり」論からみた遺句——

『源氏物語』のリライトと和歌

「聖少女」論

卒業制作

創作(陶淵明詩三首)・臨書(高野切第三種)

神 於 希 衣

〈創作〉

吟香上海まよ語り

歌 野 博

——新釈『呉淞日記』

【第五十号】

平成二十五年三月一日発行

田辺聖子と宝塚歌劇

和歌から短歌へ

樟蔭女子専門学校国文科

〔国語〕試験問題の翻刻と紹介(2)

『樟蔭国文学』総目次(1~50号)

森西真弓

安田純生

白川哲郎